

## 光源氏の物語における「宿世」の語について

丸山 薫代

### 一、はじめに

光源氏は冷泉帝即位と明石姫君誕生とを受けて、自身が天皇とはなれなかつたことに対し「宿世遠かりけり」(滯標②二八六頁)<sup>1)</sup>の思いを抱き、その後、冷泉帝が継嗣のなのまま退位するに際しては、「末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世」(若菜下④一六五―一六六頁)を「口惜しくさうざうしく」思っている。どちらも源氏物語の展開上、重要な位置にある光源氏の心中であり、これらの「宿世」の語は読者に重く響く。このような箇所において「宿世」の語が用いられることによつて、何が表現されているのか。

源氏物語における「宿世」の語および「宿世」の概念は、多屋頼俊氏<sup>2)</sup>が光源氏の須磨流離など、光源氏やその他の登

場人物の人生を動かす原動力を「宿世の因縁」と捉えて以来、源氏物語を論じる上での一つの重要なキーワードとなつた。物語の構造の根幹に関わるものとして「宿世」を捉えるこうした理解は、阿部秋生氏<sup>3)</sup>や石田穰二氏<sup>4)</sup>の反論を招きつつも、王権論へと引き継がれていった。日向一雅氏の「宿世」論<sup>5)</sup>はかなり独特なものであるが、こうした流れの中に一応位置づけることができる。

一方、森岡常夫氏<sup>6)</sup>や重松信弘氏は、思想を読み取るうとする立場から、「宿世」やその周辺の語を丁寧<sup>7)</sup>に分析する。森岡氏は、仏教において本来「前世」を意味するはずの「宿世」が、「日本文芸」では「一般にそれのみを意味することではなく、前世の因、又は現世の果の意味に用ゐられてゐる」とした上で、源氏物語の「宿世」が先行作品に比べ、より

広く深く用いられていることを論じる。ここでは、次の指摘に注目したい。森岡氏によれば、源氏物語以前の作品では「男女の仲らひ」について「宿世」が使われていたが、源氏物語では「社会人としての栄辱窮達も宿世と考へられるに至つた」という。そして、「宿世は上述のやうに、男女の宿縁を意味するもの並びに社会の栄辱を意味するものの二種に大別される」とした上で、「これらの意味の共存してゐる用例も少なくない」と述べる。

重松氏は、「宿世」「契り」「さるべき」を共に取り上げ、それぞれの表現の違いにも留意しつつ、「宿世を思う場合」の用例における「思いの内容」を、「宿縁に対する深淺・強弱などの思い」、「明暗・喜悲などの思い」、「宿世が知られる、知られないという思い」、「宿世から逃れられる、逃れられないという思い」の四種に分ける。「宿世が知られる、知られないという思い」に関しては、観相・宿曜などの關係を問題にし、「逃れられる、逃れられないという思い」に関しては、仏教的には本来宿世は人間の努力によつて変更可能だが、物語では人々は多く逃れられないように思つており、その逃れられないという思いが「物のあわれ」を創り出しているのだ、と述べる。

これらの論が「宿世」を源氏物語の重要な思想として重

く捉えるのに対し、石田穰二氏<sup>5)</sup>は、「当時一般の日常語」として「宿世」の語を理解すべきだと論じる。氏によれば、「宿世」の語は、「それが現在地点の現実であれ、仮定のことであれ、未来のことであれ、身の上の幸、不幸いづれにせよ、その成行きをいふ」のであり、「この世における運命<sup>だめ</sup>」といふほどに言つてみれば、総ての用例は満足させられ得るのだと言う。

源氏物語中に「宿世」の語は百二十例<sup>6)</sup>あるが、登場人物の会話文、心内語、あるいは登場人物の心中に即した地の文において用いられるのがほとんどで、それ以外は「語り手の評言」と呼ばれるような草子地に四例見られるのみである。登場人物あるいは語り手の認識に深く関わる語であるといえよう。本稿は、まず源氏物語中の「宿世」の語がどのような文脈で用いられるかを整理し、その上で、光源氏における「宿世」の語の表現するところを考察する。

## 二、「宿世」の語義

源氏物語における「宿世」の語を理解する上で、森岡氏の言うところの「男女の宿縁を意味するもの」と「社会の栄辱を意味するもの」との区別は、その区別の多少の曖昧さをも認めた上で、必要であると考えられる。これを私に言い

換えるならば、男女の間の縁を問題にする用法と、ある個人の運勢の高さ低さを問題にする用法との区別である。例えば、光源氏が夕霧に言う「宿世の引く方にて、なほなほしきことに、ありありてなびく、いとしりびに人わろきことぞや」（梅枝③四二四頁）とは、男女の縁に何となく導かれていい加減な結婚をすることを諫めたもので、「宿世」の語によって男女の縁の有無を問題にした例である。それに對し、女二宮の母・藤壺女御が「わがいと口惜しく人に圧されたてまつりぬる宿世嘆かしくおほゆるかはりに」（宿木⑤三七三頁）娘を幸せにしたい、と考える時、彼女は「宿世」の語によって、宮中で他の后女御たちに負けてしまった自身の低い運勢を問題にしている。

この二通りの意味が生ずる理由を、「前世の因が現世の果を導く」という宿世觀に即して考えるとすれば、前世での相手との関係の結び結び方が因となって現世での二人の關係に結果する場合が前者、前世での功德の積み方が因となって現世での地位や幸福度に結果する場合が後者、と想定できよう。ただしそれはあくまでそのように想定できるといふに過ぎず、事実としては、人間同士の縁の有無や深淺を問題にする例と、個人の運勢に焦点があると見なせる例とがある、ということに尽きる。

女性の「宿世」の場合、ある男性との縁の有無がそのままその女性の運勢の高低と関わるような例が多い。そうした例において、「宿世」を男女の縁と読むか、女性の個人の運勢と読むかは、この語に對する各論者の姿勢によっても変わってくる。例えば「とりはづして、ただ人の宿世あらば、この君より外にまざるべき人やは」（少女③四六頁）は、内大臣（もとの頭中将）に雲居雁と夕霧の仲を非難された大宮が、もし雲居雁に入内の「宿世」がなく、臣下と結婚する「宿世」があるならば、夕霧以上の結婚相手はいないと考える例であるが、「ただ人の宿世」とは「臣下との縁」であると同時に、「天皇・東宮でなく臣下の妻となる」という程度の雲居雁の運勢」とも解せる。

また、ある個人の運勢の高さ低さという意味での「宿世」は、具体的な出来事に直面して思われることは多いけれども、その場合でも、単にその出来事の側面からみた運勢というのではなく、その人の全体的な身のありように関わるものとして意識された時、「宿世」の語は用いられる。そのことは、「前世からの因縁」に関わる別の表現である「契り」や「さるべき」と比較した時、より明確になるであろう。

### 三、「宿世」の指標

第一節でも述べたように、源氏物語において「宿世」の語は、登場人物の会話や心中、あるいは語り手の認識の中で用いられる。すでに結果の出たことについて「宿世」を思う例と、将来について「宿世」を推測・心配・期待する例とがあり、両者の比率は約三対一である。自分で自分の「宿世」を思うのは、「宿世」全体の三分の一度（四二例程度）で、その大半はすでに結果の出たことに対して思う例である。例外として、明石の君が明石姫君の出産の結果に

わが身の運勢を見定めようとする「母君（＝明石の君）、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなめれば、いみじき心を尽くしたまふ」（若菜上④一〇三頁）、薫が中の君との結婚の可能性について考える「この一ふしはなほ過ぐして、つひに宿世のがれずは、こなたさま（＝中ノ君トノ結婚）にならむも、何かは他人のやうにやは」（総角⑤二五三頁）が挙げられる。将来を推測・心配・期待する文脈の「宿世」の例の大部分は、他者の、つまり親が子の、乳母・女房が主人の、などの宿世を思う例に集中している。

第二節では、「宿世」の語を理解する上で、男女の間の縁を問題にする用法と、ある個人の運勢の高さ低さを問題に

する用法とを区別すべきことを述べた。本節では、ある個人の運勢の高さ低さを問題にする用法において、その判断がどのような指標によつてなされるかを見ていく。先に結論的なことを述べておくと、源氏物語の登場人物たちが、「憂き宿世」「めでたき宿世」「思ふやうなる宿世」などの判断を下す指標は、その人物独自の幸福理解などとは関わらず、客観的であると考えられる。その指標を見ていきたいのである。

ある人物の「宿世」を判断する指標として、まず、女性がどのような人と結婚するかが挙げられる。玉鬘は鬚黒との結婚に、「思はずにうき宿世なりけり」（真木柱③三四九頁）と、自らの残念な運勢を思う。「やむごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこしなほなほしき御叔母にぞありける」（蓬生②三三三―三三三頁）は、末摘花の叔母の「心すこしなほなほし」という性質を、彼女の結婚から見える「宿世」を手がかりに納得しようとする。つまり、高い血筋から受領の妻へと「落」ちてしまったことは、彼女が前世で十分な功德を積まなかったことを意味しよう。予測的な例では、「みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま推

しはからることなるを」(若菜上④三四頁)は、朱雀院が、女三宮がどのような男と関係を持つかで、女三宮自身の「宿世」つまり運勢がどの程度のものか定まってしまふことを言っている。

次に、女性が妻としてどのような位置に定まるかが挙げられる。薄雲巻で、花散里は、二条東院での比較的恵まれた生活を受け入れ、光源氏が夜泊まりなどはしなくなったことについて、「かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなし」(薄雲②四三八頁)ている。つまり、光源氏の妻としての今の自分の位置づけを、前世に基づく自らの運勢の決着点と捉えていることになる。また、鬚黒のものと北の方は、夫の玉鬘との結婚を受けて、子どもたちに「みづからは、かく心憂き宿世、今は見はてつれば、この世に跡とむべきにもあらず、ともかくもさすらへなん」(真木柱③三七一頁)と、夫に捨てられたと思われる現在の時点を自らの運勢の決着点と捉えた発言を行う。予測的な例としては、浮舟の母は匂宮の妻として「幸せ」である中の君を賞賛しつつ、「わがむすめは他人かは、思ふやうなる宿世のおはしはてば劣らしを」(浮舟⑥一六五頁)、つまり薫の妻となった浮舟の幸運が完遂されれば、浮舟も中の君に劣らないだらう、と言っている。

また、後宮での位置も当然ながら大きな指標となる。秋好の立后を受け、内大臣(もとの頭中将)は娘である弘徽殿女御について、「女御を、けしうはあらず、何ごとも人に劣りては生ひ出でずかしと思ひたまへしかど、思はぬ人(秋好)におされぬる宿世になん、世は思ひの外なるものと思ひはべりぬる」(少女③三五頁)と嘆く。薄雲巻の藤壺の述懐における「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心の中に飽かず思ふことも人にまさりける身、と思し知らる」(薄雲②四四五頁)の「高き宿世」も、后腹の皇女として生まれたことなども含もうが、後宮での栄達などのこの世での運勢を広く含めての総括であらう。

女性にのみならず男性にも、結婚によって「宿世」を測るような例は見られる。ただし、幸不幸ないし運勢という意味の「宿世」を、男性が結婚によって測る場合には、その結婚の相手は皇女に限られている。夕霧は、六条院の女楽に際し女三宮に注目して、「いますこしの宿世及ばましかば、わがものにも見たてまつりてまし」(若菜下④一九三〜一九四頁)と、自分も「宿世」がもう少し高ければ、女三宮を手に入れたかもしれない、と思っている。柏木は女三宮との密通後、妻である落葉宮を「さすがにあてになまめかし」(若菜下④二三三頁)と見つつ、「同じくは、いま一

際及ばざりける宿世よ」(同頁)と思う。このように、夕霧も柏木も、「女三宮と結婚できるかどうか」を自らの運勢を測る指標としている。宇治十帖では、薫と女二宮との結婚を受け、夕霧が「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」(宿木⑤四七五頁)と、今上帝の皇女を許されて得た薫の運勢の高さに驚いている。薫自身もこの結婚を、自らの「宿世」の高さを表すものとして捉えている(宿木卷⑤四八六頁、蜻蛉卷⑥二七二〜二七三頁)。

子孫の栄達も一つの大きな指標である。若菜上卷第一年の終わり、冷泉帝の勅命により、新たに大将となった夕霧が四十賀を執り行った際、光源氏は立派に成長した夕霧を見て、「かの母北の方の、伊勢の御息所との恨み深く、いどみかはしたまひけむほどの御宿世どもの行く末見えたるなむさまざまなりける」(若菜上④一〇二頁)と思いを馳せる。この直前には秋好中宮主催の四十賀も行われていた。秋好は立后、夕霧は任大将と、葵の上、六条御息所双方の子が「よまぎま」に出世したのを見て、光源氏は感慨を深くする。「御宿世どもの行く末」という表現の意図するところを正

確には取りにくいけれども、それぞれの子の出世に、葵の上・六条御息所双方の、今にして明らかとなった「宿世」の高さを見ているのである。また明石尼君は明石姫君腹皇子の立坊に伴う住吉参詣に際し、「いとかたじけなかりける身の宿世のほど」(若菜下④一七二頁)を思っている。本節の冒頭に掲げた明石姫君出産に際する明石の君の例も含め、明石関係には子孫の栄達に自身の「宿世」を見る例が多い。一方、内大臣(もとの頭中将)は近江の君と対面した際、「とりたててよしとはなけれど、他人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし」(常夏③二四三頁)と、近江の君のような子を持つてしまった自身の「宿世」を嘆いている。

今までに挙げたものは、社会的地位に関わる問題として世間一般の人々からも見えやすい「宿世」である。しかしもう少し内面的に捉えられるものもある。例えば、密通されたことに関わって「宿世」を嘆く例である。「三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人々見たてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど心憂し」(若紫①二三三頁)は、藤壺が不義の子を妊娠したことに気づいて思う例、「幼くよりさるたぐひなき御ありさまにならひたまへる(女三宮ノ)御心には、(柏木ノ行動ヲ)めざましくのみ見たまふほ

どに、かくなやみたまふはあはれなる御宿世にぞありける」(若葉下④二四三頁)は女三宮の薫妊娠に対し語り手が同情する例である。ただしこれらは、妊娠によって密通が単なる秘め事ではなく社会に関わる問題になったことによるとも思われる。

このように、何らかの結果が現れた時にそこからその人物の運勢の高さを判断するような文脈の「宿世」にしる、将来に何らかの観点において何らかの「結果」が現れることを予測する文脈の「宿世」にしる、その「宿世」判断の指標はわかりやすく、ある程度以上客観的である。

しかし、指標が客観的でわかりやすいとはいえず、「宿世」の語が会話や心内語、心中に即した地の文で多く用いられることは、「宿世」判断の主観性を示している。女性が貴顕との結婚に「宿世」を測り、男性が皇女との結婚に「宿世」を測るなど、ある結果に対してそれをその人の「宿世」に関わるものとして見るかどうかには主観が関わってくる。「宿世」の語は、それこそがその人の運勢、というような強い響きを持つけれども、当事者の女君などが安易に「宿世」を口にしないの<sup>16)</sup>に対して、周囲の女房たちは簡単に「思ふやうなる御宿世」(総角⑤二八〇頁)などと言い、少し状況が変わると「思ひの外なる御宿世」(総角⑤三三三

頁)、「いと口惜しき御宿世」(蓬生②三三六)と判断を転換させる。それに対し、気高い女君たちは、安易に「宿世」を喜び、後に「宿世」を嘆くというような思考を持たない。

源氏物語にはさらに、「宿世」という判断の恣意性を暴く表現も見られる。「のがれがたかりける御宿世」(若紫①二二三頁)、「のがれざりける御宿世」(浮舟⑥二二七頁)は、自身が護衛すべき女君の密通されたことに対し、女房が自責の念から逃れようとする時の表現である。あるいは、女三宮に密通した柏木は、「なほ、かく、のがれぬ御宿世の浅からざりけると思ほしなせ」(若葉下④二二六頁)と、恣意的な「思ひなし」を強要する。とりわけ宇治の大君は、「宿世」判断の恣意性に自覚的である。彼女は、「一ところおはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれたてまつりて、宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば、みな例のことにてこそは、人笑へなる咎をも隠すなれ」(総角⑤二四六頁)、つまり、親が決めた結婚で不幸になった場合は、世間はそれを「宿世」と捉え、軽蔑しないのだ、と考えていることから読み取れるように、「宿世」判断の適用が世間で恣意的になされることに対しての醒めた目を持っている。だからこそ、薫が匂宮を中の君に導いた上で「(アナタハ)やむ」となき方(=匂宮)に思しよるめるを、宿世

などいふめるもの、さらに心になはぬものにはべるめれば、かの（＝匂宮ノ）御心ざしはことにはべりけるを、いとほしく思ひたまふるに」（総角⑤二六五頁）と、冗談めかしつつ大君に匂宮と中の君の結婚を「宿世」として納得させようとするのに対しては、即座に「こののたまふ宿世といふらむ方は、目にも見えぬことにて、いかにもいかに思ひたどられず」（総角⑤二六六頁）と切り返すのである。「宿世」判断の恣意性への自覚は大君独自の問題として捉えることも可能であるが、源氏物語の登場人物たちに、多かれ少なかれ共有されている感覚ではないだろうか。前に取り上げた薄雲巻の花散里は、光源氏との夫婦関係のありようを「かばかりの宿世なりける身」と主体的に「思ひな」すことによって、好転するかもしれないという期待を抱いた場合にそれが裏切られ悲しい思いをするようなことを、予め防止しているのである。

本節で見てきたことをまとめると、運勢の高さ低さに関わるような「宿世」の判断は、客観的で共有可能な、ある程度パターン化された指標によってなされる。その一方で、判断自体は、それぞれの登場人物の立場や思いによって、主観的、恣意的になされるのである。

#### 四、光源氏の「宿世」

前節までに、「宿世」が個人の運勢を表す場合、そこでいう「運勢」とは人生の進んだ時に得る社会的地位などの全体的かつ客観的なものであるけれども、「宿世」が会話文、心内語、心中に即した地の文、語り手の評言のみに用いられることを踏まえれば、ある人のある状態に対しそれをその人の「宿世」として判断することには、判断者の主観や恣意が関わってくる、ということを確認した。これを踏まえた上で、本節では、光源氏の「宿世」の語について、その表現するところを明らかにしたい。

源氏物語中、光源氏の持つ「宿世」が語られている「宿世」の用例は全七例で、うち六例が光源氏自身の思う例であり、それらは全て予測的ではなく反省的なものである。ただし一例は、冷泉帝の「宿世」とも理解可能である。これらの光源氏に関わる「宿世」の例は、どのように捉えることができるだろうか。

須磨巻では、光源氏は須磨の住居を「わが身だにあさましき宿世とおぼゆる住まひ」（須磨②二〇七頁）と捉えている。須磨流離という現在の局面に即した「宿世」把握である。しかし帰京後、冷泉帝の即位に遭った光源氏は、自身



の運勢の高さを総体的に把握するようになる。

宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勸へ申したりしこと、さしてかなふなめり。おほかた、上なき位にのぼり世をまつりごちたまふべきこと、さばかり賢かりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消ちつるを、当帝のかく位にかなひたまひぬることを思ひのごとうれしと思す。みづからも、もて離れたまへる筋は、さうにあるまじきことと思す。あまたの皇子たちの中にすぐれてらうたきものに思したりしかど、ただ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけり、内裏のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人の言空しからず、と御心の中に思しけり。

(濤標②二八五―二八六頁)

光源氏は「もて離れたまへる筋」つまり自身が天皇になる可能性について、「さらにあるまじきこと」と思い、「宿世遠かりけり」、つまり「自分の運命は天皇になることから遠かった」と思う。ここにはいくつかの問題点がある。第一に、「宿世」に対し「遠し」という形容詞が使われているという点である。第二に、「あまたの皇子たちの中にすぐ

れてらうたきものに思したりしかど、ただ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけり」という文脈上のつながりが今ひとつ釈然としない点である。

第一の点については、「宿世」が「遠」という表現は、源氏物語中に他に見られない<sup>17)</sup>。光源氏は臣下で、天皇になるよりは低い運勢であった、と素直に考えれば、「宿世及ばざりけり」と表現することが可能であり、その方が普通の表現である。物語はなぜこの場面で、「宿世遠かりけり」という表現を用いたのだろうか。

「天皇になるかならないか」を指標として光源氏の「宿世」を測った時、天皇にならないことは光源氏の運勢の低さを意味するはずである。しかし、物語としては「天皇にならない運命」とは表現しつつも、それを光源氏の運勢の低さ、不十分さ、として表現することは避けたのではないか。理想的主人公であるはずの光源氏が、「天皇になれない」という形で「不足がある」ことを、物語としては明言したくないのである。「この感慨に、がさはない<sup>18)</sup>」と我々が受け取ることが可能なのは「遠し」という中立的な語で表現されているからであり、しかしながら、「天皇になる可能性」に言及されることで、当然光源氏の不足はあらわになってしまっている。

第二の点について、この部分の文脈を確認したい。宿曜の「御子三人」に関わる予言がかなうようだとした上で、光源氏は「おほかた、上なき位にのほり世をまつりごちたまふべきこと」を言っていた「相人ども」の言葉を朱雀帝治世下の不遇時代にととめて忘れていたが、冷泉帝が即位したのが嬉しい、という。「自分の子の即位」という異常な事態への喜びが、同じく皇統に関わる問題であった自身の即位という問題を、光源氏に思い出させている。しかし、なぜ、桐壺院の自分への対応を思うと、「宿世遠かりけり」なのか。桐壺院に臣下と決められてしまった、その遺志を守るならば、自分は天皇になるわけにはいかず、そうした自分の状態を指して「宿世遠かりけり」と言っているのだろうか。とすれば、ここでは、光源氏は、桐壺院の遺志を尊重して「宿世遠かりけり」と自身を判断することを、主体的に選択していることとなる。<sup>19)</sup>

これらを踏まえると、「宿世遠かりけり」は、光源氏の天皇にはなれない運勢の不足を、曖昧な表現でありながら暴いており、一方で、「宿世遠かりけり」の判断は、光源氏が主体的に行ったものである、と読むことができる。光源氏は父の遺志を尊重しかつ冷泉帝に帝位を託し、「宿世遠かりけり」と思いなすことによって、天皇になるかもしれないか

った自らの運勢を低めたのであった。

しかし、自ら「宿世」を切り下げるということは、その切り下げた地点からのさらなる下落を予期しないことでもある。よってそのために、これ以降光源氏が「宿世」を飽き足らなく思うことはむしろ増えていく。濔標巻のこの時点以降、冷泉帝治世を引き立てることを中心に「御子三人」の予言をかなえることが光源氏の、あるいは物語の原動力となり、そうした状況下では、光源氏は子のありよう自身の「宿世」を見ようとするのであった。しかしそれは必ずしも満足のいくものではない。明石姫君の五十日に際し、光源氏は次のように思う。

(モシ京二引キ取ツテイタナラ) 何ごとも、いかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし、口惜しのわざや、さる所にしも、心苦しきさまにて出で来たるよ、と思す。男君ならましかばかうしも御心にかけたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世もこの御ことにつけてぞかたほなりけり、と思さるる。

(濔標②二九四頁)

宿曜によれば后となるはずの、光源氏の唯一の娘は、明石の辺鄙な地で劣り腹から生まれ、光源氏は京で彼女の五日を祝うこともできなかった。そのことを光源氏は自身

の「宿世」の不完全さとして受け取る。后がねの娘が紫の上腹に生まれて、二人で育てていけるのが良いのに、そうではない。しかし娘が劣り腹に生まれたという光源氏の「御宿世」の「かたほ」さは、その後の努力と工夫によって、光源氏自身が補っていけるものであった。

それに対して、若菜下巻の冷泉帝退位の際の憂愁は深い。六条院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを飽かず御心の中に思す。同じ筋なれど、思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうざうしく思せど、人にのたまひあはせぬことなればいぶせくなむ。(若菜下④一六五―一六六頁)

「御宿世」は、光源氏の宿世とも、冷泉院の宿世とも解積できるが、いづれにせよ、冷泉院の子孫が帝位を継いでいくような「宿世」ではなかったのであった。「宿世遠かりけり」と、自身の帝位への思いを切り捨てた光源氏であったが、自身の即位への思いと引き換えに大事に守ってきた冷泉朝は、跡継ぎのないまま終わることとなる。「宿世」の語で光源氏がそれを捉えた時、子孫が代々天皇を継いでいくこともありえたかもしれないなかった身の、運勢の飽き足らなさが言われることになる。

これ以降、光源氏が子のありようから自身の「宿世」を思うことはない。横笛巻では、美しく成長する薫を見て、薫の出生の「契り」により女三宮の密通もあったのだろう、と密通を「思しなほ」しつづ、「みづからの御宿世も、なほ飽かぬこと多かり」(横笛④三五―一頁)と自身の運勢を嘆く。その際に問題にするのは、光源氏の妻のありようである。大勢の妻の中で、女三宮こそが身分、世評の面からも、容姿、人柄の面からも、最も不満のない妻であるはずなのに、その女三宮が密通の果てに出家したことが残念である、という。第三節で確認したように、結婚から「宿世」を測るのは女性が中心とはいえ、男性も、皇女との結婚からは自身の「宿世」を測ることがあった。けれども、天皇になるかならないか、また子孫が帝位を継いでいくか、といった点から「宿世」を問題にしてきた光源氏であることを思えば、妻たちとの関係の中で自身の「宿世」を捉えていくというのは、今までとは異なるありかたであると言えよう。幻巻では、紫の上の死を受けて、「かくいまはの夕近き末にいみじき事のとぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすきに」(幻④五二―五頁)と述べる。晩年になって最愛の紫の上に死なれるという悲しみを味わわなければならなかったことによって、自身の

運勢がどれ程のものであったかがはっきりとわかる、と言  
う。光源氏は子孫によって実現される「宿世」を生きるこ  
とをやめ、妻たちとの関わりの中で、自らの「宿世」を静  
かに見つめていくのである。

このように、濔標巻で「宿世遠かりけり」と自身の栄達  
の「宿世」を切り下げ、子孫の栄達によって表現される「宿  
世」に期待した光源氏は、若菜下巻に至り「末の世までは  
え伝ふまじかりける御宿世」を知り不満を抱く。子孫への  
期待の中でも一番大きなものであった冷泉帝への期待が終  
わった後は、妻たちとの関係という身の回りの環境の中で、  
自身の運勢を捉えるようになる。「宿世」判断の指標が客  
観的であり、かつ、判断自体は主観的なものであることに  
よって、光源氏の自身の人生への期待と諦め、期待自体の  
切り下げのさまが、「宿世」の語によって表現されているの  
である。

【注】

(1) 『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』に拠り、巻  
名・巻数・頁数を示した。引用文中の括弧内は稿者の注で  
ある。

(2) 多屋頼俊「宿世の縁——光源氏を中心に——」(同『源氏物

語の研究』法蔵館、一九九二。同『源氏物語の思想』法蔵館、  
一九五二からの再録、初出は一九四二。

(3) 阿部秋生『源氏物語研究序説』(東京大学出版会、一九五九)  
第二篇第一章第三節二「神意と宿世」。

(4) 石田稜二「源氏物語に見る「宿世」の語について」(『国語  
と国文学』一九八五・六)。

(5) 日向一雅「宿世の物語の構造——父と子——」(同『源氏物  
語の主題「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、一九  
八三。初出は一九七九)等。

(6) 森岡常夫「宿世」(同『源氏物語の研究』清水弘文堂書房、  
一九六七。一九四八出版の重版)。

(7) 重松信弘「宿世の思想」(同『源氏物語の仏教思想』平楽寺  
書店、一九六七)。

(8) 注4論文。  
(9) 「すくせ」六十七例、「みすくせ」一例、「御すくせ」四十六例、  
「御すくせども」二例、「すくせすくせ」二例、「御すくせすく  
せ」二例で、これらを合計して百二十例となる。

(10) 同様に男女間の縁の有無・深淺を問題にした例として、雨  
夜の品定めで妻の出家未遂について論じた「絶えぬ宿世浅  
からで、尼にもなさで尋ねとりたらむも」(帚木①六七頁)、  
冷泉帝が玉鬘と鬚黒の結婚を知り、自分とは縁がなかった

と思う「口惜しう、宿世異なりける人なれど」(真木柱③三五二頁)、以前二条院で会った浮舟を宇治に見出し、匂宮が思う「宿世のおろかならで(浮舟ヲ)尋ね寄りたるぞかしと(匂宮ガ)思し出づるに涙ぐまれぬ」(浮舟⑥一三八頁)などが挙げられる。

(11) 運勢の高さ低さを問題にするような例として、「目ざましき女の宿世かな」(若菜下④一七五頁)は明石尼君の、東宮の曾祖母として住吉参詣に参加した異様な運勢の高さを人々が問題にしている。「いとほかなかりけれど、さすがに高き人の宿世なりけり」(蜻蛉⑥二二二頁)は、亡くなったと思われる浮舟について薫が、薫と匂宮という二人の貴顕に愛された高い運勢であったと振り返っている。

(12) 石井公成「思想基盤としての仏教——女の宿世と親の因果——」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識 早蕨』至文堂、二〇〇五・四)は、「男女のことに關して言う場合は、「前世での行い」は「前世における相手との関係のし方」を指すことが多いであろうから、その場合は、「前世からの縁」を意味することになる」とする。

(13) この中には、他者が、「あなたは自分の宿世を自身でこのように把握するように。」と述べている例も含めている。すなわち、柏木が密通に際し女三宮に述べた「なほ、かく、の

がれぬ御宿世の浅からざりけると(アナタハ)思ほしなせ」(若菜下④二二六頁)と、匂宮と中の君の結婚及び自身と大君の結婚を、大君に受け入れさせようとして、薫の言った「(アナタハ)やむごとなき方に思しよる(≡自身ガ匂宮ト結婚シタイ)めるを、宿世などいふめるもの、さらに心になはぬものにはべるめれば、かの(≡匂宮ノ)御心ざしはこと(≡アナタデハナク中ノ君)にはべりけるを、いとほしく思ひたまふるに」(総角⑤二六五頁)の二例である。これらは、起こった(あるいは起こりつつある)事態を女に受け入れさせようと言っているだけで、柏木も薫も、それを本当に「宿世」と思っているとはいえない。よって、「他者が思う例」ともしづらいたため、ここに仮に含めている。

(14) 藤裏葉巻の「残りとまれる人の、中将はかくただ人にて、わづかになりのはるめり。宮は並びなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ」(藤裏葉③四四七頁)を参照して、この若菜上巻の感慨も、夕霧より秋好の方が出世したことを言うものと取る読みも行われているが、若菜上巻の該当箇所では夕霧が大将に出世しており、藤裏葉巻とは状況が異なっていると読むべきであろう。

(15) 佐藤勢紀子氏は、女性たちは「宿世」「契り」「さるべき」などの表現を使わない場合でも、「憂き身」などの表現で宿

世の思いを表しているのだとする（佐藤勢紀子「女の宿世」同『宿世の思想』ペリカン社、一九九五。初出は一九八三）。しかしながら、思いの深浅は措いた上で、「身」と表現する場合と「宿世」と表現する場合とは、捉え方が異なるとすべきであろう。

(16) 光源氏の持つ「宿世」の用例中、本稿で取り上げなかった一例は、弘徽殿太后が思うものである。

のどやかならで還らせたまふ響きにも、后（＝弘徽殿太后）は、なほ胸うち騒ぎて、いかに思し出づらむ、世をたもちたまふべき御宿世は消たれぬものにこそ、といにしへを悔い思す。（少女③七五頁）

(17) 石田穰二氏は同様の表現として、浜松中納言物語巻四の「…河陽県の上に契り結び聞こえさせける縁の深かりけるに引かれて、例なきあとをあらためて、われ渡りて、逢ひ見たてまつるべき宿世は遠かりけれど、この若君の生れ給へ

る契り思ふに、さすがにいみじう深かりけり」（池田利夫校

注・訳『新編日本古典文学全集 浜松中納言物語』小学館、二〇〇一・二九七～二九八頁）を指摘する。しかしこれは、人と人との縁の有無・深浅をいう例である点で濫標巻の例とは違っており、かつ、中納言と河陽県の後との、非常に深い縁でありながら「逢う」ということは少ない、という独特の関係を表現するために選ばれた表現である上に、日本と唐との距離を連想させるものであると思われる。

(18) 藤井貞和「宿世遠かりけり」考」（『論集中古文学』源氏物語の表現と構造』笠間書院、一九七九）。

(19) 辻和良氏は、「光源氏は、自らが「ただ人」であることを、宿世として主体的に選び取ったのである」と述べる（辻和良「ただ人」光源氏の〈政略〉とその転換点」同『源氏物語の王権——光源氏と〈源氏幻想〉——』新典社、二〇一一。初出は二〇〇五）。